巻頭言　　～　音楽的な見方・考え方　～

群馬県高等学校教育研究会音楽部会
会　長　　大　熊　信　彦
（群馬県立太田女子高等学校長）

本部会では、新学習指導要領（平成30年告示）による授業実践への円滑な移行に向けて、今年度から３年間、「授業研究会」「夏季研究会」「講演会」を統一した研究テーマで実施することになりました。そのテーマは「『現行学習指導要領を基とする取組の充実』及び『新学習指導要領の理解と実践』」です。

８月の「夏季研究会」（会場：吉井高等学校）では、県教育委員会指導主事の島田聡先生から〈音楽的な見方・考え方〉を通して新教育課程を理解する講義をいただきました。また、文部科学省主催「伝統音楽指導者研修会」に参加した会員の先生からの報告、ギターを用いた器楽指導の提案授業とそれに基づくグループ演習（展開案づくり）などが行われました。

９月の第１回授業研究会（会場：利根商業高等学校）では、夏季研究会の成果を受ける形で、「音色や奏法を工夫してギターアンサンブルを楽しもう」と題する小川唯佳先生による研究授業が行われました。「カノン」（パッヘルベル作曲）をギターで演奏する技能、音楽表現の創意工夫、主体的に音楽に関わる態度がバランスよく育まれる内容の授業で、有意義な研究会になりました。

１月の第２回授業研究会（会場：桐生女子高等学校）では、「リコーダーの響きを味わおう」と題する青柳亮先生による研究授業が行われました。楽器に親しみ旋律の美しさを味わいながらリコーダーの音色や奏法の特徴を理解し、音楽表現の多様性を追求する授業で、第１回授業研究会から引き続いて「器楽指導」を取り上げたことによって、新学習指導要領の趣旨の理解を深める機会になりました。

第２回授業研究会と同じ日に一体的に行われた「講演会」では、静岡大学名誉教授の北山敦康先生を講師としてお招きして、「芸術科（音楽）における『資質・能力』及び『見方・考え方』～私たちはどこから来てどこへ行こうとしているのか～」の演題でご講演いただきました。社会における音楽や音楽教育の価値などを幅広い知見をもとにお話しいただき、今後の授業の在り方の考察につながる貴重な機会になりました。

また、「県高等学校文化連盟　高校芸術祭」（今年度から名称に高文連が加わりました。）の「団体演奏会」（７月）及び「個人演奏会」（１１月）では、出演した生徒たちがそれぞれの特徴を生かした演奏を披露しました。音楽会を支える運営側の先生や生徒たちが、先を読みながら的確に動いていただいたことも印象的でした。

さて、令和２年の夏は、世界の約200の国や地域から１万人を超えるオリンピック選手が、パラリンピックにも４千人を超える選手が日本に集うと言われています。一方で世界は今、国同士の国際的な協調の枠組みや自由・多様性・人権の尊重といった価値観が揺らいでいるように思います。東京オリンピック・パラリンピックは日本から世界に向けて、秩序の維持と平和の尊さはもとより、世界の「多様性と調和の大切さ」を発信するチャンスでもあると考えます。

音楽教育は、人の心に直接に訴える「音」を通して、生徒たちが世界の様々な音楽文化やその背景などを体験的に知り「多様性と調和の大切さ」を認識できるものです。「感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けること」と示された〈音楽的な見方・考え方〉を働かせる音楽活動は、この多様性と調和の実感的理解を深める学びにつながっていくでしょう。今後、こうした趣旨を生かした授業展開の工夫など更なる実践研究が求められます。

結びに、本部会の各行事の実施に尽力いただいた副部会長や理事の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、会員の先生方の益々のご活躍と本部会の発展を祈念いたします。